

黒船来航に関わる文書

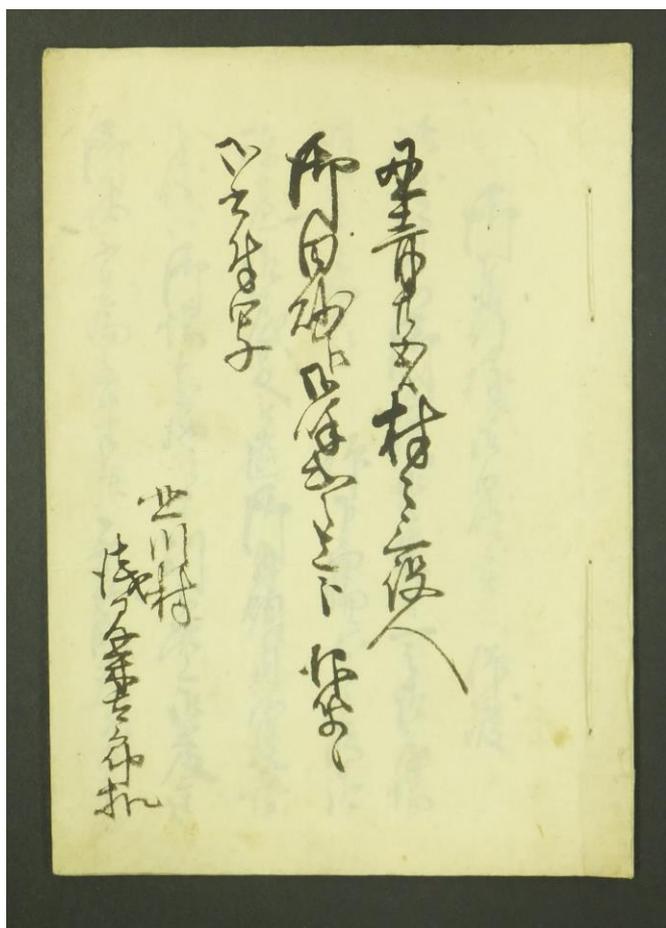
今年(2018年)は、明治150年にあたります。各地で戊辰戦争や明治維新の展示・イベントなどを開催しているので、ご覧になった方も多いのではないのでしょうか。

そこで今回は、幕末のはじまりともいえる「黒船来航」に関わる史料をご紹介します。この史料は、北川村(現飯能市北川)に残されていたものです。ペリー来航の約半年後、嘉永6(1853)年12月に村役人が領主である川越藩から呼び出された際の、奉行と代官の仰せ言が記されています。言い渡された内容は、「このたびの内海御台場建設に伴い、下高輪の屋敷を陣屋として一の台場の警護を任されることとなった。しかし、領地の普請や相州警備などによる莫大な出費のためすでに藩の財政は大変厳しい。そこで、村高100石あたり5両の上納金を申し付けるので納めよ。」というものでした。

ペリー来航以降、幕府は、江戸湾の防備のために内海(品川沖)に設置する11基の砲台の建設に取りかかりますが、その中で第一台場の警護を任されたのが、川越藩でした。しかし、以前から務めていた相州(現神奈川県)沿岸警備(台場警護に伴い解任)の負担などにより、当

時同藩の財政はすでに逼迫していました。このような状況の中、今回さらに台場警護の費用がかかることになったため、領地の村々へ上納金を命じることにしたのです。命じられた領民たちは、日常の税に加えて課される上納金に苦しむこととなりました。

黒船来航というと、ついつい幕府や大名だけの問題と思いがちですが、このような形で庶民の生活も影響を受けたのでした。(金澤)



北川村(現大字北川) 浅海家文書